

健康人間学への期待

京都大学医療技術短期大学部

教育研究条件整備拡充委員会

濱 弘 道

科学の進歩によって人間ははかり知れない恩恵をうけているが、反面重大な課題を背負うこととなったのもまた事実である。核や公害の問題などはその顕著な例であろう。科学が本来、人間の幸福に資するものであるとすれば、これはまことに皮肉な、そしてゆゆしいことである。科学における諸々の現象の証明は、その現象を構成要素に分解し、これを再構成することによって行われるため、細部へ細部へと追求がなされ、いきおい全体像を見失うこととなった。このような傾向は医学においても例外ではありえず、単なる器官、単なる組織の問題にのみ目を奪われ、その器官や組織を有する人間全体についての理解に欠けるところがあったと思われる。臓器移植、遺伝子組み換えなどにおける目をみはる進歩の陰で、人間の幸福とはいったい何かという問いに私どもは、いまとまどっている。

健康は、人間のその幸福の根幹に関わることである。この健康について考えていくと、現在の医学・医療に欠落しているものから、どうしても目を逸らすことはできない。未曾有の高齢化社会を迎えたわが国において、機械的に処置をうけるのみで家族からも見放されて、ただひたすら生命だけを長らえている老人の多いことひとつをとってみても、人間の幸福とは何かについて暗澹たらざるをえないのであって、*quality of life* が大きな関心をよんでいるのも故なしとしない。包括的視点にたった「人間」に対する深い理解がようやく求められるゆえんである。いわゆる「人間学」をどう定義するかはむずかしいことではあるが、今日ほど医学・医療に「人間学」が求められる時代はないといえよう。

ともあれ、現在の医療に *co-medical staff* が不可欠であることはいまや自明の理であるのにこれら *staff* の日本における教育体制が十分であるとは到底考えられないのが実状である。そしてこれを声高に叫んでみたところで、それがいかに空しいことであるかはこれ

までの経緯をみれば明らかである。しかし、いや、だからこそ本学において、医学・医療に欠落しているものといま正面からとりくみ、科学としての医学が人間の幸福に真に資することができる手がかりを模索し、それにいささかでも寄与することができると思えば、四年制への道は自ら開けてくるものと思われる。

教育研究条件整備拡充委員会において、学内研究プロジェクトチーム結成を考えたとき、第一の柱としてたてたのは、じつにこの「人間学」のプロジェクトであった。Coordinatorとして哲学の石井誠士助教授を推薦したのは当然のことであったが、石井助教授はこれを「健康人間学」とし、私どもの期待に応えられてただちにその活動を開始された。委員会で正式に決定したのは昭和62年9月30日であるが、10月26日にはもう第1回のプロジェクト通信が学内に配布されているから、わずか1カ月も経ずして、石井助教授はその明確な展望のもとに精力的な活動を組織されたのであった。以来、今日まで十数回に及ぶ会合を重ねられ、ここにその研究成果を「紀要別冊健康人間学」として世に問われることとなったのは、いささかこれに関わったものとしてまことにうれしいことである。

医学・医療の混迷のこのときに、わが学内において専門を異にするいろいろの人達が集まって、一つの目標のもとに新しい学問、「健康人間学」を創められた。“天の時、地の利、人の和”という。「健康人間学」の発展を祈ってやまないものである。